私は小中学校から一歩身を引いていた。まったく学校に行っていなかったわけではないが、週２，３日は必ず学校へ行かない日があった。学校の環境に気持ちの悪さを感じたためである。その時間は私にとって、一度立ち止まってあたりを見回し、自分が一体どうありたいのかを考える時間となった。

　小学生の頃の私は学校ではとても生真面目な生活を送っていた。周りでは毎日のように友達が叱られていたが、それを横目にひいきまでされるような待遇にいたように思う。どんな時でも大人の言うことには疑問を持たずに言われたことを実行していればそれでよかった。学校が示す正解にそぐった行動、言動。しかし内心はいつもびくびくしていた。どうしたらこの環境に適応できるのだろう。どうしたら先生に怒鳴られずに済むのだろうか。そんな不安や考えの答えとして行ったことが、この学校という環境への服従であった。そんな私に転機が訪れる。

　それは小学５年生の頃だった。私の担任の先生は、いつも言うことを聞かない生徒や気に入らない子供に嫌味を言っていた。その言葉に反発した生徒は怒鳴りつけられた。しかし、クラスの友達はだんだんストレスがたまり、怒りを爆発させる人が増えていった。先生はそれを力ずくで抑え込もうとした。小学生と大人の力の差は歴然としていたが、学級崩壊してしまった。一日のうち、授業の数時間は先生の説教で削られる毎日が続いた。途中で誰かが口出しすれば、すかさず怒鳴りつけられた。お前たちのために話してやっているのだと。もう訳が分からなくなってしまった。自分より大きなものに服従する癖がついていた私だったが、明らかに理不尽な目の前の現実に戸惑った。自分はいったいこの環境でどうあったらよいのだろうか。そんな私に疑問を深めさせるその先生の言葉があった。

「そんなんじゃ社会に通用せんぞ」

その言葉がどうも引っかかった。社会に通用しないってなんだ？社会に通用する生徒の姿ってなんだ？そもそもその社会って何のことを指すんだ？あまりに漠然とした彼の言う社会というもの、実態のつかめないその大きな世界に送り出される自分。そこに適応するために私たち子どもは大人の言うことを聞いているのか？それまで考えてもみなかった疑問の扉が次々に開いた。理不尽な環境への怒りと疑問が、私の思考を掻き立てた。その時の私の思考は、まだ自分の中で学校という敵をこさえることで、考えを合理化させようという未熟なものであった。けれど確かに、自分の頭で考えようという思考の原動力になる出来事であった。

中学校では、小学校よりもさらに凄然とした集団行動が求められた。小学校から中学校で変わったことは、大人が子供を管理するところを子供が子供を管理するようになっただけであった。思春期になり、他人の顔色に合わせようという自然な子供の心の発達もその状況を助長したのだろうが、それは自然なことで、私が不安に思ったのはそこではない。それはその状況を教員たちが「君たちの成長だ」と賛美したことであった。確かに生徒が平然と兵士のごとき集団行動を自発的に行ってくれたら楽であろう。しかしそれを子供の成長と見なすというのはいかがなものだろうか。この疑問をとりあえず担任の先生に投げかけてみたが、どうもぴんと来ない様子で、君は何を言っているのだ？と聞き返された。私にも正直確信的な考えがなかったため、言葉に詰まった。

　学校はどうやら閉じられた環境になりやすいのだ。問題は、その環境の内と外とを行き来するのが難しいことにある。学校と家との往復の生活にはそれも難しかった。私にとって学校はそのような環境、あるいは構造だったのである。

では、そんな環境で教員が持つ論理とはいったいどのようなものなのか。教員が言う社会というものも、それまで歩んできた道にそぐったものによって定義づけられる。そう仮定すれば、彼らが私たちに対しての指導の仕方も理解できる。あの、小学校の担任の先生が私たちを見て、そんなんじゃ社会で通用せんぞ。といったこともうなずける。ようするにその社会というものは彼が歩んできた道そのものであるのだ。しかし、彼がいくらそれまでの人生、社会でうまくやっていけてきたからと言って、その身のこなしを私たちに強制しようと思うのであれば、それは少々傲慢な考え方ではなかろうか。なぜなら、私たち一人一人が住む社会というものは、それぞれがどうありたいのか、どこに身を置くかでその定義自体がひっくり返るほどあいまいなものなのである。極端な話になってしまうが、例えば私がどんなに学校で通用するとされる常識や生活習慣を身に着けたからと言って、地球の裏側のある村に放り込まれたら、それらは何の役にも立たないであろう。ということは、この義務教育課程で学校が作り出したい人間というものは、紛れもないこの日本社会に即戦力として活躍する人間ということになる。私が学校で受けてきた教育は、例えるなら、見たこともないブラックボックスを渡され、それがなんであるかを問う前にその利用方法を指導される。そんな印象だった。なんだか違和感がある。ブラックボックスの利用方法など後でいい。私は学校という場所が、子供にとって、まずそのブラックボックスの中身、つまり本質について考える環境であったほうが良いのではないかと思うのだ。

そもそも日本の学校体制が今の形になったのは明治に入ってから。日本の歴史から見れば、まだまだこの学校の形は歴史が浅いのである。明治以前の教育は、学校という機関がいっぺんに担うものではなく、寺子屋などの形で各個人の手にゆだねられていたのだ。しかしそれでは学力に大きなばらつきが出てしまう。だから、国の近代化を図るうえで、子供に均一な教育による学力の底上げが求められたのだ。今の時代になってもその形の根本は変わっていない。だが、確かに学力の底上げはされたものの、それ以上のことを学校がしようとなると、今の構造ではなかなか腰が重くなってしまうのが現状だ。

今までにように、誰もが同じ学校に行って同じ方向を向き、同じ種類の大人から黙って同じ教育を受けるような環境では何か大事なものがないがしろにされてしまう気がする。それはやはり多様性であろう。もっと言えば、その多様性をエラーありきで内包してしまう社会のふところの深さだ。これは学校のみならず、人と人とが共存する社会では普遍的にネックになることである。

私は特別教育者になりたいわけではないが、今までの経験を通して日本の教育にはすごく関心を持った。私ははじめ、この学校という環境への憎悪をもって考え始めたわけだが、仮に学校批判しようにも、悪はどこにも存在しないのだ。確かに今の学校の形は政府などの、ある意思によって生み出されたものなのだが、だからと言って政府が悪いとも言えない。そう、問いの仕方を「誰が悪い」という言葉に頼っている限り堂々巡りするばかりなのである。今回は、学校の構造そのものの問題点を、自分のいつも目の前にあった教員と生徒との関係性という側面から考察した。しかし学校を形作る要素はそれだけではない。保護者であったり、地域であったりもするわけだ。まだまだ考えが熟すには時間がかかるし、今の自分の立ち位置からは見えないものも必ずある。それだけはわかっておきたい。

私は学校が嫌いだったわけだが、こうしてこの愛農高校という「学校」にいる。この学校で学ばせてもらったことは、すべては師であるということ。この世の万物の中で、物事を教え、与えられる存在はしいて言うなら神か、この宇宙そのものだけであると、今の私は本気で思う。そう、私たちはみな学ぶ人なのである。それぞれのうちにあるものはすべて与えられたもの。一つとして初めから自分のうちにあったものではないである。

　とまあ、なんやかんや考えてみたのだが、いや、それにしても分からないことばかりである。しかし、この分からないという歯がゆさは、何かをわかるためでも正解を知るためにあるものでもなく、誰かとの交わりのためにあると信じている。本当にそうなのかは、これからの人生でゆっくり確かめていこうと思う。すべてはあらゆるつながりの中に。